子どものこころの発達研究センター

1 構 成 員

	平成 26 年 3 月 31 日現在	
教授	2 人	
病院教授	0 人	
准教授	0 人	
病院准教授	0 人	
講師（うち病院籍）	0 人	(0 人)
病院講師	0 人	
助教（うち病院籍）	0 人	(0 人)
診療助教	0 人	
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	10 人	
医員	0 人	
研修医	0 人	
特任研究員	4 人	
大学院学生（うち他講座から）	0 人	(0 人)
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	0 人	
その他（技術補佐員等）	8 人	
合計	24 人	

2 教員の異動状況

森 則夫（教授 兼 浜松センター長）	（平成 8 年 4 月 1 日～現職）
武井 教使（教授）	（平成 19 年 4 月 1 日～現職）
辻井 正次（客員教授）	（平成 18 年 4 月 1 日～現職）
松崎 秀夫（客員教授）	（平成 24 年 11 月 1 日～現職）
玉井 日出夫（客員教授）	（平成 25 年 10 月 1 日～現職）
土屋 賢治（特任准教授）	（平成 19 年 4 月 1 日～現職）
高貝 就（特任准教授）	（平成 25 年 4 月 1 日～現職）
涌澤 圭介（特任准教授）	（平成 25 年 7 月 1 日～現職）
山田 浩平（特任講師）	（平成 25 年 4 月 1 日～現職）
Anitha A.Pillai（特任助教）	（平成 20 年 4 月 1 日～現職）
中島 俊思（特任助教）	（平成 21 年 4 月 1 日～現職）
望月 直人（特任助教）	（平成 21 年 10 月 1 日～平成 25 年 10 月 15 日退職）
伊藤 大幸（特任助教）	（平成 23 年 4 月 1 日～現職）
高柳 伸哉（特任助教）	（平成 23 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月末日退職）
野田 航（特任助教）	（平成 23 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月末日退職）
村山 恭朗（特任助教）	（平成 25 年 12 月 1 日～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成25年度	
(1) 原著論文数 (うち邦文のもの)	34 編	(24 編)
そのインパクトファクターの合計	20.77	
(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	1 編	
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(3) 総説数 (うち邦文のもの)	9 編	(9 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(4) 著書数 (うち邦文のもの)	6 編	(6 編)
(5) 症例報告数 (うち邦文のもの)	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Wakusawa K *, Sugiura M, Sassa Y, Hyeonjeong J, Yomogida Y, Horie K, Sato S, Yokoyama H, Kure S, Takei N, Mori N, Kawashima R. : Adaptive ability to cope with atypical or novel situations involving tool use: An fMRI approach. Neuroscience research 2014 in Press [2.204]
2. Noda W*, Ito H, Fujita C, Ohnishi M, Takayanagi N, Someki F, Nakajima S, Ohtake S, Mochizuki N, Tsujii M. : Examining the relationships between attention deficit/hyperactivity disorder and developmental coordination disorder symptoms, and writing performance in Japanese second grade students. Research in Developmental Disabilities, 34, 2909-2916. 2013. 【発達心理学】 [2.483]
3. 中島俊思・大西将史・伊藤大幸・野田 航・望月直人・高柳伸哉・染木史緒・大嶽さと子・瀬野由衣・林陽子・辻井正次 : 「3歳児健診における保健師によるPARS短縮版活用の可能性と課題」小児の精神と神経・53・P47-P57. 2013年,[-]
4. 野田航・伊藤大幸・原田新・中島俊思・高柳伸哉・染木史緒 : 「日本語版Strength and Difficulties Questionnaire 自己評定フォームの信頼性・妥当性の検討—単一市内全校調査を用いて—」臨床精神医学42巻, P119-P127. 2013年,[-]
5. 野田航・伊藤大幸・中島俊思・大嶽さと子・高柳伸哉・染木史緒 : 「小中学生を対象とした日本語版Strength and Difficulties Questionnaire 教師評定フォームの標準化と心理測定学的特徴の検討—単一市内全校調査を用いて—」臨床精神医学42巻, P247-P255. 2013年,[-]
6. 伊藤大幸・田中善大・高柳伸哉・望月直人・染木史緒・野田航・大嶽さと子・中島俊思・原田新・辻井正次 : 「保育の記録による発達尺度改訂版(NDSC-R)の開発、信頼性および妥当性の比較」精神医学55巻, P263-P272. 2013年,[-]

7. 野田航・岡田涼・谷伊織・大西将史・望月直人・中島俊思・辻井正次：「小中学生の不注意および多動・衝動的行動傾向と攻撃性、抑うつとの関連」心理学研究84巻，P168-P174.2013年,[-]
8. 伊藤大幸・望月直人・中島俊思・瀬野由衣・藤田知加子・高柳伸哉・大西将史・大嶽さと子・岡田涼・辻井正次：「保育記録による発達尺度（NDSC）の構成概念妥当性：尺度構造の検討と月齢および不適応問題との関連」発達心理学研究24巻， P211-P220. 2013年,[-]
9. 高柳伸哉・伊藤大幸・野田航・田中善大・大嶽さと子・染木史緒・原田新・中島俊思・望月直人・辻井正次：「小中学生における欠席行動と教師評定による学校適応との関連」精神医学55巻,P355-P362. 2013年,[-]
10. 伊藤大幸・田中善大・高柳伸哉・大嶽さと子・原田新・中島俊思・野田航・染木史緒・望月直人・辻井正次：「保育記録による発達尺度改訂版(NDSC-R)の標準化 月齢区分ごとの標準値およびカットオフ値の検討」 P549-560. 精神医学55巻. 2013年,[-]
11. 野田航・高柳伸哉・中島俊思・望月直人：「特集：対人援助職の必須知識（発達障害のアセスメントを知る）3.発達障害児者の支援のための個別支援計画の作成と介入・支援効果の把握②成人期以降の支援の実際」臨床心理学・金剛出版・第13巻4号・P523-528. 2013年,[-]
12. 中島俊思：「特集：発達障害児者の支援 乳幼児健診において発達相談から療育にどうつなげていくのか」臨床心理学・金剛出版・第14巻 2014年5月4日,[-]
13. 高柳伸哉・伊藤大幸・田中善大・原田新・大嶽さと子・望月直人・染木史緒・野田航・中島俊思・辻井正次：小中学生における欠席行動と保護者評定による行動的・情緒的問題との関連. 臨床精神医学, 42, 1563-1572. 2013. 【発達心理学】 ,[-]
14. 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田新・野田航・辻井正次：肯定的・否定的養育行動尺度の開発：因子構造および構成概念妥当性の検証. 発達心理学研究. 印刷中. 【心理測定学】 ,[-]
15. 望月直人・伊藤大幸・原田新・野田航・松本かおり・高柳伸哉・中島俊思・大嶽さと子・田中善大・辻井正次：中学生の非行行為と攻撃性、抑うつとの関連. 精神医学. 印刷中. 【発達心理学】 ,[-]
16. 伊藤大幸・松本かおり・高柳伸哉・原田新・大嶽さと子・望月直人・中島俊思・野田航・田中善大・辻井正次：ASSQ 日本語版の心理測定学的特性の検証と短縮版の開発. 心理学研究. 印刷中. 【心理測定学】 ,[-]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Kamenon Y, Iwata K, Matsuzaki H, Miyachi T, Tsuchiya KJ, Matsumoto K, Iwata Y, Suzuki K, Nakamura K, Maekawa M, Tsuji M, Sugiyama T, Mori N. : Serum levels of soluble platelet endothelial cell adhesion molecule-1 and vascular cell adhesion molecule-1 are decreased in subjects with autism spectrum disorder. *Molecular Autism* 4:19, 2013. [-]
2. 松本かおり・伊藤大幸・小笠原恵・明翫光宜・染木史緒・谷伊織・行廣隆次・内山登紀夫・黒田美保・稲田尚子・岩永竜一郎・萩原拓・原幸一・井上雅彦・村上隆・中村和彦・杉山登志郎・内田裕之・市川宏伸・辻井正次：医療・福祉機関における発達障害に関するアセスメントツールの利用実態に関する調査. *精神医学*, 55, 1093-1102. 2013. 【心理測定学】 ,[-]
3. 原田新・伊藤大幸・望月直人・田中善大・大嶽さと子・高柳伸哉・中島俊思・野田航・染木史緒・辻井正次：日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire 自己評定フォームの構成概念的妥当性：抑うつ，攻撃性，親評定フォームとの関連から. 小児の精神と神経. 印刷中. 【発達心理学】 ,[-]
4. 田中善大・伊藤大幸・高柳伸哉・原田新・染木史緒・野田航・大嶽さと子・中島俊思・望月直人・辻井正次：保育記録による発達尺度(NDSC)を用いた学校適応の予測：保育所年長時から小学1年時までの縦断調査を通して. 発達心理学研究. 印刷中. 【発達心理学】 ,[-]
5. 田中善大・伊藤大幸・野田航・高柳伸哉・原田新・望月直人・大嶽さと子・辻井正次：保育記録による発達尺度改訂版(NDSC-R)を用いた就学後の適応及び不適応の予測. 保育学研究. 印刷中. 【発達心理学】 ,[-]
6. 原田新・伊藤大幸・望月直人・中島俊思・野田航・染木史緒・高柳伸哉・田中善大・大嶽さと子・辻井正次：日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire 教師評定フォームの構成概念的妥当性：抑うつ，攻撃性，親評定フォーム，自己評定フォームとの関連から. 小児の精神と神経. 印刷中. 【発達心理学】 ,[-]
7. 田中善大・伊藤大幸・高柳伸哉・原田新・野田航・大嶽さと子・中島俊思・望月直人・辻井正次：小中学校における友人関係問題に対するASD傾向及びADHD傾向の影響の検討. *精神医学*. 印刷中. 【発達心理学】 ,[-]

インパクトファクターの小計 [0]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Muramatsu-Kato K, Itoh H, Kobayashi-Kohmura Y, Murakami H, Uchida T, Suzuki K, Sugihara K, Kanayama N, Tsuchiya KJ, Takei N. : Hamamatsu Birth Cohort (HBC) Study Team. Comparison between placental gene expression of 11 β -hydroxysteroid dehydrogenases and infantile growth at 10 months of age. *Journal of Obstetric and Gynaecology Research* 40:465-72, 2014. [0.841]

2. Sugihara G, Takei N*. : Renaming schizophrenia coupled with proper public education is an optimal way to overcome stigma. *Psychol Med*. Jul;43(7):1557-8, 2013.[5.587]
3. Shimmura C, Suzuki K, Iwata Y, Tsuchiya KJ, Ohno K, Matsuzaki H, Iwata K, Kameno Y, Takahashi T, Wakuda T, Nakamura K, Hashimoto K, Mori N. : Enzymes in the glutamate-glutamine cycle in the anterior cingulate cortex in postmortem brain of subjects with autism. *Molecular Autism* 4:6, 2013. [-]
4. Frasch K, Larsen JI, Cordes J, Jacobsen B, Wallenstein Jensen SO, Lauber C, Nielsen JA, Tsuchiya KJ, Uwakwe R, Munk-Jørgensen P, Kilian R, Becker T. : Physical illness in psychiatric inpatients: Comparison of patients with and without substance use disorders. *International Journal of Social Psychiatry* 59: 757-764, 2013. [1.504]
5. Larsen JI, Andersen UA, Becker T, Bickel GG, Bork B, Cordes J, Frasch K, Jacobsen BA, Jensen SOW, Kilian R, Lauber C, Mogensen B, Nielsen JA, Rössler W, Tsuchiya KJ, Uwakwe R, Munk-Jørgensen P. : Cultural diversity in physical diseases among patients with mental illness. *Australian and New Zealand Journal of Psychiatry* 47(3): 250-258, 2013. [3.293]
6. Kamio Y, Inada N, Moriwaki A, Kuroda M, Koyama T, Tsujii H, Kawakubo Y, Kuwabara H, Tsuchiya KJ, Uno Y, Constantino JN. : Quantitative autistic traits ascertained in a national survey of 22 529 Japanese schoolchildren. *Acta Psychiatr Scand* 128: 45-53, 2013. [4.857]
7. Sakurai N, Tsuchiya KJ*, Suzuki K, Wakuta M, Takei N, Mori N. : Children's behavioural problems are perceived differently by their teachers and parents : The Hamamatsu School Survey. *J Brain Sci*. 40:28-53 (2013.04) [-]
8. 平島太郎・伊藤大幸・岩永竜一郎・萩原拓・谷伊織・行廣隆次・松本かおり・内山登紀夫・小笠原恵・黒田美保・稲田尚子・原幸一・井上雅彦・村上隆・染木史緒・中村和彦・杉山登志郎・内田裕之・市川宏伸・辻井正次 : 日本版乳幼児感覚プロフィールの標準化：信頼性および標準値の検討. *精神医学*, 55, 785-795. 2013. 【心理測定学】 ,[-]
9. 谷伊織・伊藤大幸・行廣隆次・平島太郎・安永和央・内山登紀夫・小笠原恵・黒田美保・稲田尚子・萩原拓・原幸一・岩永竜一郎・井上雅彦・村上隆・染木史緒・中村和彦・杉山登志郎・内田裕之・市川宏伸・田中恭子・辻井正次 : 日本版 Vineland-II 適応行動尺度の開発：適応行動尺度の項目分析と年齢による推移. *精神医学*, 55, 971-980. 2013. 【心理測定学】 ,[-]
10. 宮地菜穂子・伊藤大幸・村上隆・辻井正次 : 児童養護施設入所児童の適応行動：日本版 Vineland-II 適応行動尺度による検討. *精神医学*, 56, 43-52. 2014. 【心理測定学】 ,[-]
11. 平島太郎・伊藤大幸・岩永竜一郎・萩原拓・谷伊織・行廣隆次・大西将史・内山登紀夫・小笠原恵・黒田美保・稲田尚子・原幸一・井上雅彦・村上隆・染木史緒・中村和彦・杉山登志郎・内田裕之・市川宏伸・辻井正次 : 日本版青年・成人感覚プロフィールの構成概念妥当性：自閉

症サンプルに基づく検討. 印刷中. 【心理測定学】,-]

インパクトファクターの小計

[16.082]

(2-1) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Tsuchiya KJ, Asano R, Harada T, Kugizaki Y, Nakahara R, Nakayasu C, Okumura A, Suzuki Y, Takagai S, Itoh H, Takei N for HBC Study Team. : Placental weight and sleep onset among infants: Hamamatsu Birth Cohort (HBC) Study. *Journal of Developmental Origins of Health and Disease* 4: S222, 2013) ,-]

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 土屋賢治: コホート研究から発達障害を理解する. 最新医学 68: 2068-2079, 2013【精神医学】,-]
2. 土屋賢治: 自閉症は増えているか. 教育と医学 61: 286-295, 2013【精神医学】,-]
3. 高貝就・土屋賢治: 親年齢と精神疾患. 精神科 24:322-327, 2014. 【児童精神医学】,-]
4. 高貝就: 思春期の発達障害と精神科臨床における諸問題. 高校生活指導 197:97-103, 2014. 【児童精神医学】,-]
5. 高貝就: 精神疾患の合併によって学校臨床像がどう変わるのか. 子どもの心と学校臨床 10:46-54, 2014. 【児童精神医学】,-]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

1. 村上隆・伊藤大幸・行廣隆次・谷伊織・安永和央・平島太郎: 発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(1): なぜ数値化が必要なのか? アスペハート, 34, 124-131. 2013. 【心理測定学】,-]
2. 村上隆・伊藤大幸・行廣隆次・谷伊織・安永和央・平島太郎: 発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(2): 心理測定を経験する アスペハート, 34, 124-131. 2013. 【心理測定学】,-]
3. 行廣隆次・伊藤大幸・安永和央・谷伊織・平島太郎・村上隆: 発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント(3)認識の能力の測定: 知能検査とIQ アスペハート, 36, 112-121. 2014. 【心理測定学】,-]
4. 梅田亜沙子, 惠藤絢香, 岩永竜一郎, 鈴木勝昭, 辻井正次: 発達障害児・者の感覚刺激への反応異常の評定 Sensory Profile について. *子どものこころと脳の発達*. 4:53-61 (2013.09)

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森則夫, 杉山登志郎, 岩田泰秀, 亀野陽亮, 栗田大輔, 鈴木勝昭, 高貝就, 竹林淳和,

土屋賢治, 中里一貴, 横倉正倫, 涌澤圭介, 和久田智靖: *臨床家のためのDSM-5 虎の巻*, (2014.02) 【児童精神医学】

2. 涌澤圭介: 第3章第2節 2 ASD (自閉症スペクトラム障害). 辻井正次, 明翫光宜, 松本かおり, 染木史緒, 伊藤大幸 編: 発達障害児者支援とアセスメントのガイドライン. 金子書房. 東京. pp278-281. 2014年.
 3. 中島俊思: 「事例2, 乳幼児健診から療育機関につながった ASD 以外の発達障害のケース」 P 322-330・金子書房・東京・発達障害者支援とアセスメントに関するガイドライン 2014年2月
 4. 中島俊思: 「精神症状の評価法 A. 健康検査ならびに精神科診断に関連した臨床評価・精神健康・スクリーニング 児童・青年の適応と精神的健康状態の包括的評価(Strengths and Difficulties Questionnaire)」中山書店・東京・臨床評価で読み解くこころ(仮題)VI. 2014年 (印刷中)
 5. 辻井正次 (監修) 明翫光宜・松本かおり・染木史緒・伊藤大幸 (編): 発達障害児者支援とアセスメントのガイドライン. 東京: 金子書房. 2014. 【心理測定学】
 6. 著者・編者: 辻井正次, 明翫光宜, 松本かおり, 染木史緒, 伊藤大幸 竹林淳和:
分担タイトル名: ADHD の発見、診断のためのアセスメント、ADHD のバイオマーカー、発達障害児者支援とアセスメントのガイドライン、金子書房、pp.282-285、pp.405-412、(2014.02)
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

4 特許等の出願状況

	平成 25 年度
特許取得数 (出願中含む)	1 件

1. 登録番号: US 8518659 B2

出願名称: Method for determination of degree of risk of onset of high-functioning autism

発明者: 森則夫、中村和彦、鈴木勝昭、土屋賢治、岩田圭子、松崎秀夫

出願人: 国立大学法人 浜松医科大学

登録日: 2013年8月27日

5 医学研究費取得状況

(万円未満四捨五入)

	平成 25 年度
(1) 文部科学省科学研究費	7 件 (860 万円)
(2) 厚生労働省科学研究費	1 件 (130 万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0 件 (0 万円)
(4) 財団助成金	0 件 (0 万円)
(5) 受託研究または共同研究	2 件 (7,980 万円)
(6) 奨学寄附金その他 (民間より)	0 件 (0 万円)

(1) 文部科学省科学研究費

武井教授: 挑戦の萌芽研究. 統合失調症死後脳と周産期仮死モデル脳に共通する遺伝子メチル化の探索, H 24~H25, 代表 120 万.

土屋賢治：基盤研究A(新規)、自閉症の予測兆候及び低出生体重と社会認知障害との関連研究を主とした縦断的疫学研究, H25～H 27, 代表：230万円.

高貝 就：基盤研究C(新規)血清メタボローム解析による自閉症脂肪酸代謝異常の解明と診断マーカーの確立, H 25～H 27, 代表：150 万円

涌澤圭介：若手研究B,前頭-頭頂葉機能インバランス仮説に基づく自閉性障害の脳機能解明と評価指標作成, H 25～H 28, 100 万円

山田浩平：若手研究B、中枢神経系における stathmin1 の生理機能と機能調節機構の解明、H 23～H25 年, 110 万円

中島俊思：若手研究B、就学前の低出生体重児母子の地域支援
H 23～H 25 年, 40 万.

伊藤大幸：若手研究B、自閉症者の愛着感情、道徳感情およびユーモアの特異性に関する機能的脳画像研究. H24～H26, 110 万円.

(2) 厚生労働科学研究費

土屋賢治：成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業(継続), 低出生体重児の予後及び保健的介入並びに妊婦及び乳幼児の体格の疫学的調査手法に関する研究, H25-26 年度、分担：130 万円、代表：横山徹爾 (国立健康科学院)

(5) 受託研究または共同研究

1. 独立行政法人科学技術振興機構 脳科学研究戦略推進プログラム(精神・神経疾患の克服を目指す脳科学研究(健康脳)) <課題F>, 自閉症の病態研究と新たな診療技法(診断・予防・治療)の開発, H23～27年度、7,980万円, 研究代表者：精神医学 森則夫.
2. JST 社会技術研究開発 研究啓発成果実装支援プログラム, 発達障害の子どもへの早期支援のための『気づき』・診断補助手法の実装, H24～27年度、分担：0万円, 研究代表者：大阪大学大学院、片山泰一.

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件	0 件
(2) シンポジウム発表数	0 件	12 件
(3) 学会座長回数	0 件	0 件
(4) 学会開催回数	0 件	2 件
(5) 学会役員等回数	1 件	2 件
(6) 一般演題発表数	5 件	

(1) 国際学会等開催・参加

5) 一般発表

口頭発表

1. Yamada K.: Increased stathmin1 expression in the dentate gyrus of mice causes abnormal axonal arborization、第13回慶北-浜松合同医学シンポジウム、平成25年9月11日、Kyungpook

2. Ito H, Hirashima T, Yasunaga K, Tani I, Tsuji M: Validation of a Japanese Version of the Sensory Profile: Comparison Between Individuals With and Without Developmental Disorders. The 12th European Conference on Psychological Assessment. 2013. San Sebastian.

ポスター発表

1. Tsuchiya KJ, Asano R, Harada T, Kugizaki Y, Nakahara R, Nakayasu C, Okumura A, Suzuki Y, Takagai S, Itoh H, Takei N: for HBC Study Team. Placental weight and sleep onset among infants: Hamamatsu Birth Cohort (HBC) Study. The 8th World Congress on Developmental Origins of Health and Disease, Singapore, November 17-20, 2013.
2. Takagai S: Treatment network for children with Autistic Spectrum Disorders in Hamamatsu City. The 13th Hamamatsu-Kyungpook Joint Medical Symposium. Daegu, South Korea, Sep, 2013, Daegu, South Korea.
3. Ito H, Ohtake S, Tanaka Y, Tsuji M: Stability of Depression and Aggression in a Community Sample of Children and Adolescents: A Longitudinal Study. 2013 International Symposium on Education and Psychology. 2013. Fukuoka.

(2) 国内学会の開催・参加

1) 主催した学会名

第40回 日本脳科学会, 2013, 9, 28-29, アクティシティ浜松, コンgressセンター

第110回 小児精神神経学会大会, 2013, 11, 8-9, 名古屋市テレビピアホール

3) シンポジウム発表

武井教使: オーバービュー: 観察研究からみた胎生期環境と精神発達.

第2回 DOHaD 研究会年会. 東京, 平成25年6月7-8日.

土屋賢治: シンポジウム わが国におけるこころの発達コホート研究の将来展望.

第33回日本社会精神医学会, 2014年3月21日, 東京.

土屋賢治: 胎児～乳幼児期(小児含む)に着目した先制医療の精緻化: 胎児期から出発する発達障害の理解と対応—浜松母と子の出生コホート研究. JST 研究開発戦略センター

(CRDS) 科学技術未来戦略ワークショップ, 2014年2月6日, 東京.

土屋賢治: 特別セミナー: 自閉症スペクトラム障害の研究と支援の最前線. 第110回日本小児

精神神経学会, 2013年11月8日, 東京.

土屋賢治: ワークショップ: 胎生期や出生後における発育の長期的な影響—妊婦健診で考えて

ほしいこと— 第126回関東連合産科婦人科学会, 2013年10月19日, 浜松.

土屋賢治: シンポジウム: DOHaD(Developmental Origins of Health and Disease): 後発的に顕在

化する発達期の影響. 第40回日本毒性学会学術年会, 2013年6月19日, 千葉.

高貝 就：児童期の ASD と不安. 第 6 回日本不安障害学会、平成 26 年 2 月、東京.

涌澤圭介：杉山登志郎：トラウマの生物学的研究の現在と将来.

第 12 回日本トラウマティックストレス学会、東京、H25 年 6 月、東京

山田浩平：中枢におけるリン酸化 stathmin1 の機能解析、Neuro2013、

平成 25 年 6 月 22 日、京都

中島俊思・松本かおり・辻井正次：大会シンポジウム発表、日本心理臨床学会 第 32 回大会、

「発達障害児早期発見・早期支援のための大規模縦断調査研究からの報告③ ス
クリーニングツールを導入した X 市乳幼児健診の参加児と就園後の縦断フォロー」

2013 年 8 月 26 日

伊藤大幸：小中学生の発達とメンタルヘルスに関する縦断コホート研究—思春期の問題行動の

予測と因果的メカニズムの探索—。日本発達心理学会第 25 回大会自主シンポジウ
ム（企画・司会・話題提供）。2014. 京都.

ポスター発表

伊藤大幸・望月直人・田中善大・野田航：否定的・肯定的養育行動尺度の開発：因子的妥当性
および収束的・弁別的妥当性の検証。日本心理学会第 77 回大会。2013. 札幌.

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

武井教使：Schizophrenia International Research Society（国際統合失調症学会）academic organisor

日本 DOHaD 研究会 理事

土屋賢治：日本 DOHaD 研究会 理事

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0 件	10 件

(2) 外国の学術雑誌の編集

武井教使：国際専門誌(peer-review journal)の editorial board member（編集委員）

1. *British Journal of Psychiatry* [IF:6.606]誌の editorial board member

2. *Psychological Medicine* [IF:5.587]誌の editorial board member

3. *Schizophrenia Bulletin* [IF:8.486]誌の editorial board member

4. *International Review of Psychiatry* [IF:4.920]誌の editorial board member

5. *European Psychiatry* [IF:3.285]誌の statistical adviser

6. *Acta Psychiatrica Scandinavica* [IF:4.857]誌の editorial board member

7. *Journal of Neurodevelopmental Disorders* [IF:3.448]誌の editorial board member

8. *PLOS ONE* [IF:3.730]誌の statistical advisory board member

9. *PLOS ONE* [IF:3.730]誌の Academic Editor

※ *PLOS ONE* 誌：Academic Editor では、月に数件の受理の決定

(submitted papers editorial process)にもかかわっている。

土屋賢治：国際専門誌(peer-review journal)の editorial board member（編集委員）

I.PLOS ONE [IF:3.730]誌の Academic Editor

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

9 共同研究の実施状況

	平成 25 年度
(1) 国際共同研究	1 件
(2) 国内共同研究	10 件
(3) 学内共同研究	2 件

(1) 国際共同研究

精神科疾患をもつ患者の身体疾患の有病率調査、デンマーク、ドイツ、イタリアなど。オールボー大学精神科 Povl Munk-Jorgensen 教授

(2) 国内共同研究

1. 発達障害の遺伝学的研究、理化学研究所 吉川武男シニアリーダー、共同研究
2. 発達障害の遺伝学的研究、国立成育医療研究センター 周産期病態研究部 秦健一郎先生、共同研究
3. PET による発達障害のセロトニン仮説の証明、浜松ホトニクス、機器・施設利用による共同研究
4. 発達障害の血清学的研究、千葉大学 橋本謙二先生、共同研究
5. 自閉症診断補助装置の開発、静岡大学工学部システム工学科 海老澤嘉伸教授および大阪大学大学院 片山泰一教授、共同研究
6. 発達障害の早期発見をめざしたコホート研究(対象者収集とデータ解析)、国立健康科学院 横山徹爾部長、共同研究
7. 発達障害の診断法、国立精神神経センター 児童思春期精神保健部 神尾陽子先生、共同研究
8. わが国における Developmental origins of Health and Disease(DOHaD)研究の方向性の検討、国立健康・栄養研究所 栄養教育研究部 瀧本秀美部長および国立保健医療科学院 生活環境研究部 佐田文宏部長、共同研究
9. エコチル調査における調査票の作成について、国立成育医療研究センター アレルギー科 大矢幸弘科長、情報および技術提供
10. 大規模コホート研究における追跡法の調査、国立保健科学医療院 生涯健康研究部、横山徹爾部長、情報および技術提供

(3) 学内共同研究

1. 精神疾患の PET 研究、メディカルフォトニクス研究センター 生体機能イメージング研究室 尾内康臣教授
2. 発達障害の早期発見のためのコホート研究、産婦人科学講座 金山尚裕・伊東宏晃教授、精神医学講座 森則夫教授

10 産学共同研究

	平成 25 年度
産学共同研究	1 件

森則夫、鈴木勝昭、土屋賢治 自閉症診断補助装置の開発.

静岡大学工学部システム工学科 海老澤嘉伸教授、

大阪大学大学院 片山泰一教授、(株)JVCKENWOOD.

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

- 脳画像研究：PET を中心とした発達障害の病態解明に貢献
- 社会心理学的研究：子どもの発達に沿った課題とその対策を発信
- 疫学研究：乳幼児の発達パターンの解明。

13 この期間中の特筆すべき業績，新技術の開発

1. 被災地支援(福島県) 震災直後より継続的に行ってきた福島県浜通り地区の教育支援において、福島県教育委員会との連携を強め、また継続的支援とそのニーズを正確にとらえるための調査を継続的に行っている。
2. GazeFinder (乳幼児の社会性の発達の評価装置) の開発と社会実装の着手 (株・JVCKENWOOD と共同開発)

14 研究の独創性，国際性，継続性，応用性

子どものこころの発達研究センターは、近年取り沙汰されることの多い「子どものこころの危機」のありようを解明し、その科学的な対処法を発信する大学連合組織である。現在、国内5大学（大阪、金沢、福井、千葉、浜松医科）との連合のもと、他に例のないミッションを掲げた大学連合は研究のみならず専門家の養成にも成果を上げ始めている。具体的には、インクルーシブ教育カリキュラムに対応可能な早期発達支援プログラムや、いじめ防止プログラムの作成を、5大学連合を中心に5大学連合で研究成果を上げた研究者たちが中心になって担当した。これらのプログラムは全国の教育現場への普及が間近である。また、5大学連合の研究・教育の成果に対する反響は大きく、平成26年度より鳥取大学、弘前大学にもあらたに「子どものこころの発達研究センター」が設立され、5大学と連合することとなっている。

15 新聞，雑誌等による報道

「子どものこころの発達研究」講演会、静岡新聞、平成25年4月4日